



Title	発達障害における感覚刺激への反応異常に関する研究 ・広汎性発達障害児における感覚刺激への反応異常～日本語版Sensory Profileによる評定～・日本版青年・成人感覚プロフィールの標準化：信頼性および標準値の検討
Author(s)	梅田, 亜沙子
Citation	大阪大学, 2013, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/34600
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏名（梅田亜沙子）	
論文題名	発達障害における感覚刺激への反応異常に関する研究 〔・広汎性発達障害児における感覚刺激への反応異常～日本語版Sensory Profileによる評定～ ・日本版青年・成人感覚プロフィールの標準化－信頼性および標準値の検討－〕
〔論文内容の要旨〕 発達障害、とりわけ、広汎性発達障害をもつ者に、感覚刺激への反応異常がみられることは良く知られている。この感覚の問題は、学校や社会生活での適応に影響することから、臨床上その評定が不可欠である。しかし、これまで本邦には、海外の先行研究に照らし合わせ、支援立案や研究に適用できるツールがなかった。そこで、本研究では、海外で頻用されるSensory Profile(SP)の日本版について検討した。 まず、日本版青年・成人用SP (AASP-J) の標準化を目的に、コミュニティサンプル1198名 (11-82歳) を対象にAASP-Jによる他施設調査を行った。その結果、AASP-Jを構成する質問項目はいずれも十分な内的信頼性を有すること、および、AASP-Jにおけるカットオフ値は原版とは異なる可能性があることが明らかになった。次に、児童用SPを用い、広汎性発達障害児35名 (7-16歳) とその保護者を対象に感覚の問題を評定した。その結果、見過ごされやすい感覚の問題である過剰な低反応、前庭感覚の問題、複数の感覚領域の統合の問題などが詳しく評定できた。 以上より、日本版SPの支援・介入における有用性が示唆された。	
〔目的〕 発達障害、とりわけ、広汎性発達障害をもつ者に、感覚刺激への反応異常がみられることは良く知られている。この感覚の問題は、学校や社会生活での適応に影響することから、臨床上その評定が不可欠である。しかし、これまで本邦には、海外の先行研究に照らし合わせ、支援立案や研究に適用できるツールがなかった。そこで、本研究では、海外で頻用されるSensory Profile(SP)の日本版について検討した。	
〔方法ならびに成績〕 まず、日本版青年・成人用SP (AASP-J) の標準化を目的に、コミュニティサンプル1198名 (11-82歳) を対象にAASP-Jによる他施設調査を行った。その結果、AASP-Jを構成する質問項目はいずれも十分な内的信頼性を有すること、および、AASP-Jにおけるカットオフ値は原版とは異なる可能性があることが明らかになった。次に、児童用SPを用い、広汎性発達障害児35名 (7-16歳) とその保護者を対象に感覚の問題を評定した。その結果、見過ごされやすい感覚の問題である過剰な低反応、前庭感覚の問題、複数の感覚領域の統合の問題などが詳しく評定できた。	
〔総括〕 以上より、日本版SPの支援・介入における有用性が示唆された。	

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (梅田 亜沙子)		
論文審査担当者	(職)	氏 名
	主 査 教 授	片 山 泰 一
	副 査 教 授	棟 居 俊 夫
	副 査 准 教 授	鈴 木 勝 昭

論文審査の結果の要旨

発達障害、とりわけ、広汎性発達障害をもつ者に、感覚刺激への反応異常がみられた際、学校や社会生活での適応に影響することから、臨床上その評定が不可欠であるにもかかわらず、これまで本邦には、海外の先行研究に照らし合わせ、支援立案や研究に適用できるツールがなかった。本研究では、海外で頻用されるSensory Profile(SP)の日本版について、日本版青年・成人用SP(AASP-J)の標準化を目的に調査を行い、AASP-Jを構成する質問項目やカットオフ値などについて解析。次いで、児童用SPを用い、広汎性発達障害児とその保護者を対象に感覚の問題を評定。その結果、見過ごされやすい感覚の問題である過剰な低反応、前庭感覚の問題、複数の感覚領域の統合の問題などを詳しい評定が可能になり、日本版SPの支援・介入における有用性を示唆した点で、学位の授与に値すると考えられる。